

[報告] 第 32 回歴史地震研究会巡検参加報告

早稲田大学大学院 社会科学研究所 地球社会論専攻 修士課程* 高岸冨佳

A Report of Field Trip during the 32th Annual Meeting of Historical Earthquake Studies

SAEKA TAKAGISHI

Graduate School of Social Sciences, Waseda University
Nishiwaseda 1-6-1, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050 Japan

§ 1. はじめに

第 32 回歴史地震研究会が 2015 年 9 月 21 日(月)から 23 日(水)の三日間に渡り、京都府京丹後市峰山の京丹後市峰山総合福祉センターで開催された。21 日から二日に渡り研究発表会が行われ、理系、文系など多方面にわたる研究報告を聞くことができた。

文系である私は理系分野に関する研究報告を聞くことが新鮮であった。また文系の研究報告では様々な研究アプローチがあることを学ぶことができた。研究発表会により良い刺激を受けたことで、より一層自身の研究に精進しようという気持ちが高まった。

研究発表会に関して報告したいことは他にもあるが、ここでピリオドを打ち、以降『1927 年北丹後地震の地震断層、被害と復興』をテーマとして 23 日に行われた現地見学会の様相について簡単に報告する。

§ 2. 巡検のコース

巡検は 9 月 23 日 9 時から開始した。巡検参加者は約 50 人であった。参加者は A 班 B 班の二組に分けられ、2 台の貸し切りバスに乗って出発した。そのため巡検コースも二つのパターンに分けられた。

A 班のコースは峰山総合福祉センター→峰山商工会館→本町通 吉村商店→丹後震災記念館・峰山町震災記念塔・増長院震災供養塔→網野町郷(小池)および高橋(樋口)の郷村断層保存地→昼食 アミティ丹後→琴引浜鳴き砂文化館→網野町掛津 琴引浜→丹後鉄道網野駅 解散であった。

これに対し B 班は峰山総合福祉センター→丹後震災記念館・峰山町震災記念塔・増長院震災供養塔→本町通 吉村商店→峰山商工会館→網野町高橋(樋口)および郷(小池)の郷村断層保存地→昼食 アミティ丹後→網野町掛津 琴引浜→琴引浜鳴き砂文化館→丹後鉄道網野駅 解散というコースであった。

巡検は北丹後地震をテーマとして廻ったが、峰山・網野の文化にも触れることができ、非常に充実していた。特に北丹後地震を引き起こした断層を実際に見ることができたことは、参加して良かったと感じたこと

である。

§ 3. 巡検内容

これより内容について触れていく。当日は天気が非常によく巡検日和であった。9 時に峰山総合福祉センターに集合した。A 班の案内役は植村善博氏(佛敎大学教授)で、B 班の案内役は新谷勝行氏(京丹後市教育委員会)であった。私は B 班だったため、新谷氏の案内を受けた。同氏の案内は非常に丁寧で親切であった。事前に配布された、冊子は巡検先に関する解説が細かく記載されており、巡検するにあたり非常に参考になった。

初めに峰山総合福祉センターについて説明を受けた。ここは今回の研究会会場であり、またちりめん創業 250 年を記念して作られた建物である。京都ちりめんの歴史について触れることができた。

次に丹後震災記念館・峰山町震災記念塔・増長院震災供養塔について説明を受けた。

峰山町震災記念塔は復興途上に建設されたもので高さ 4.5m、幅 1.9m の大規模な慰霊碑である。裏に碑文があり、それをみると震災の被害と復興について記述されている。また犠牲者の慰霊と震災を後世に引き継ぐために建立したことが記述されている。

ここで一旦 A 班 B 班合流し記念撮影を行った。集合写真は巡検記の最後に写真 4 として掲載している。写真 4 をみても震災記念塔の規模が大きいことがわかる。北丹後地震で一番目立っている石碑はこの記念塔で間違いのないだろう。当時の人々の震災を風化させないという気持ちが伝わってくるようだった。

丹後震災記念館は昭和 4 年 3 月 7 日に震災を永遠に記念するべく発議され、京都府によって設計された。震災のシンボリック建築物である。設計したのは京都府出張所に勤務した技師一井九平である。当時は財団法人によって毎年慰霊祭が行われるなど、様々なイベントが行われた。しかし戦時体制への移行に伴い、行事や事業も中断され、公民館や錬成道場として使用されるようになった。現在は建物の老朽化

* 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
電子メール:saeka @ akane.waseda.jp

が進み維持が難しくなったが、平成 17 年 3 月 10 日に京都指定文化財(建築)に指定されている。実際に建物の中を見てみると、壁がボロボロになっていた。これからも維持が続けられるように、維持費の確保ができることを望みたい。

このように生き残った被災者は、後世に震災の被害を伝えるために、石碑・記念館等を作った。しかし 90 年たった現在に於いてこれらは老朽してしまった、若しくは知られていない存在となっている。時代の流れによって少しずつ震災の記憶が風化してしまうのは仕方がないことかもしれない。しかしそれでも震災の記憶を引き継ぐ方法はないか、と考えさせられた。

その後も峰山における復興建築物などを見て回った。中でも吉村商店が印象に残った。吉村商店は明治 5 年創業で 143 年にもわたる歴史を持つ。峰山に於いて最も古いちりめん屋である。特に 4 代目吉村伊助は、経済困難な優秀子弟に対し学資の給与、町村に対し地方改善費の提供を行うなど、峰山に対し多大な貢献をした人物である。地震直後、政府に対する復興援助の要請や機業復旧対策へ、府・町村代表とともに尽力したのも彼である。

この吉村商店は北丹後地震で焼失し、現在建っている物は復興建築物である。しかし幸いにも土蔵だけは残存し、現在も使用されている。今回は建物の中に入れてもらうことができ、土蔵を見ることができた。また本物のちりめんも見ることができ、その美しさに女性陣は魅了されていた。

そして次に今回のメインである郷村断層保存地について説明を受けた。峰山からバスで網野へ移動した。保存地は高橋(樋口)と郷(小池)の二か所に存在し、B 班は前述の通り高橋(樋口)を先に見学した。

この断層跡は段差に砂が被り、坂の様になっていたが、断層がはっきりとわかる形で保存されていた。約 90 年前の断層がこのように見えることは非常に意義がある。

普段は小屋の中に保存されているため、外からしか見ることができない。しかし今回は特別に小屋の中に入れてもらうことができた。巡検者は皆、断層跡を踏まないように気を付け、順番に回りながら見学した。



写真 1 郷村断層高橋(樋口)地点。上下のずれが確認できる。

続いて郷(小池)の見学を行った。ここは道路が曲がっており、はっきりと横ずれしたことがわかるポイントで。昔の写真を見ると、道が断層によって分断されている様子がわかる。震災前はまっすぐであった道が、現在は不自然に曲がった道となっている。写真2を見ても道が曲がっていることが見てわかる。巡検者は真剣な眼差しで断層跡を眺め、断層について話し合っていた。



写真2 郷村断層郷(小池)地点。石碑部分で左横ずれが 2.60m 生じた。

最後に琴引浜海岸・琴引浜鳴き砂文化館を巡検した。はじめて鳴き浜に来た私は本当に砂が鳴るのか半信半疑であったが、本当にキュッときれいな音がなったので思わず感動してしまった。他の巡検者も鳴き浜に夢中になっていた。海が非常にきれいであり、このきれいな海が鳴き浜を作っているのだという。鳴き

浜が鳴くのは砂によく磨かれた石英がまざっているためであり、この石英はきれいな海によって洗われるという。そのため鳴き浜を守るために日々海をきれいにしている努力をしているそうである。



写真3 鳴き浜に夢中になる巡検者一同

§ 4. おわりに

今回なかなか行く機会がない場所を見て回り、考えさせられることが多く、深く勉強をすることができた。また貴重な体験によって良い刺激を受け、非常に充実した巡検となった。特に文系・理系など多方面における研究者が集まる歴史地震研究会だからこそ、普段であれば自分で気づくことのできない巡検ポイントなどを、先生方に教えていただけたことができた。

私は非常に新鮮身を感じながら、巡検に参加することができた。本当に幸せなことであった。巡検で得た知識、感動を忘れずに、これからも自分の研究に精進していきたい。

§ 5. 謝辞

内容の豊富な今回の研究会を成功裡に終えることができたのは、ひとえに、研究会運営者が研究会参加者のことを考え、工夫を凝らしてくださったお蔭である。最後になりましたが、私をはじめとする研究会参加者のために、第32回歴史地震研究会の研究発表会、公開講演会、巡検について企画、下準備、運営、案内役等に携われた新谷勝行様をはじめ関係者の皆さまに対し、心から感謝申し上げます。

